



日本統計学会 会報 2010.7.25 No. 144

発行——日本統計学会
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町3-6 能楽書林ビル5F
(財) 統計情報研究開発センター内 日本統計学会事務局
Tel & Fax: 03-3234-7738
編集責任—岩崎 学(理事長) / 山下 智志(庶務理事)
内田 雅之(広報理事) / 根本 二郎(広報理事)
振替口座—00190-2-61361
銀行口座—みずほ銀行広尾支店普通 1092212番

JAPAN STATISTICAL SOCIETY NEWS

目次

1. 巻頭随筆：のどかな時代のメディアンの思い出田中勝人... 1	3.2 「計算代数統計の研究をはじめて」青木 敏... 9
2. 2010 年度統計関連学会連合大会について(第三報)稲葉敏夫, 椿 広計, 吉村 宰... 3	4. 博士論文・修士論文の紹介..... 12
2.1 会場について 3	5. 会員から
2.2 参加申し込みについて 4	5.1 総務省統計局ホームページ「統計学習サイト」 のリニューアル三上明輝... 13
2.3 大会プログラムについて 4	5.2 政府統計のマイクロデータの利用について油井清吾... 13
2.4 企画セッション一覧 4	6. 2010・2011年度評議員選挙結果..... 15
2.5 コンペティション 5	7. 研究部会新設公募 16
2.6 チュートリアルセッション 5	8. 理事会議事録..... 16
2.7 市民講演会のご案内 6	9. 研究集会案内..... 18
2.8 統計局・統計センター見学ツアー 6	10. 公募情報 18
2.9 第3回横幹連合総合シンポジウム 6	11. 新刊紹介 19
3. シリーズ：統計学の現状と今後	12. 学会事務局から..... 19
3.1 「林木成長データ採取にたずさわって」柳原宏和... 7	13. 投稿のお願い..... 20

会員の皆様へのお知らせ

2010年度統計関連学会連合大会のお知らせが同封されています。

1. 巻頭随筆：のどかな時代のメディアンの思い出

田中 勝人（一橋大学）

ここでは、私にとって自由な時間があった今から20年ほど前の時代、それは大学にとっても古きよき時代の終わり頃の思い出について、少し書いてみたい。

当時、私の所属する研究科の大学院修士課程入試の可否判定会議では、ボーダーラインに並んだ受験生の可否を決定するのに、成績順に並んだ受験生（同一成績の者は同一人とみなす）の中の成

績1位の者について可否投票を行い、「否」が過半数の場合は全員を不合格として、合否決定を終了する。そうでなければ成績1位の者を合格として、次に、2位の者について同様の投票を行う。以下、成績順に1人ずつの可否投票を繰り返して、「否」の票が初めて過半数に達した時点で、その者を含め下位の者は不合格とする。そのような方式で、合否判定を行っていた。大学院でも入学定員を充足することが要請される現在の入試と比べれば、定員充足のことに悩む必要のなかった時代というのは、何とのどかであったことかと思う。

それにしても、この方式ものどかであり過ぎた。この方式では、最大でボーダーラインに並んだ人数分の投票を行うことになり、種々の手間がかかる。そこで、私は、全く同じ結果をもたらす方式で効率的な方法がないかを考えた。投票前に成績分布が示されており、各投票者は何人を合格させるのが望ましいかを決めてあるはずであるから、その人数を投票すればよいのではないかと思ひ、その結果、メディアンを使う方法を思いついた。それは、教授会のメンバー n 人 (n は、まず奇数と仮定する) の各々が、成績上位者の何番目までを合格とするか、その番号を投票したとき (全員を不合格とする場合は0)、 n 個からなる投票番号のデータのメディアンをボーダーライン上の受験生の合格者数とするものである。

実際、ボーダーライン上の受験生について1人ずつの可否投票をして合格者が m 人であったとすると、全員合格の場合は m 回、それ以外は $m+1$ 回の投票が行われたことになる。ここで、成績が i 番目の者に投票された「否」の票数を $a(i)$ とする。したがって、「可」の票数は $n - a(i)$ となり、合格者が m 人であることから、不等式 $a(m) < n/2 < a(m+1)$ が成り立つ。ここで、 $a(i)$ は単調非減少であり、 m 人が全員合格の場合は $a(m+1) = n$ とおくことにする。

他方、成績上位者の何番目までを合格にするか、その番号を投票した場合、上の投票結果から、投票番号 i の票数は $a(i+1) - a(i)$ なり、 i までの累積票数は $a(i+1)$ となることがわか

る。なお、 $a(0) = 0$ である。このことと上述の不等式から、累積票数の半分をもたらす投票番号は m になることがわかる。すなわち、 m がメディアンとなり、合格者数に一致することになる。

具体例として、 $n = 51$ で、ボーダーラインに5人が並んでいる場合に、何番までを合格とするかの投票結果が次の通りであったとする。

投票番号	1	2	3	4	5
票数	10	15	11	8	7
累積票数	10	25	36	44	51

この場合、投票番号をデータとみなしたときのメディアンは3であり、 $m = 3$ 人を合格とすることになる。なお、このデータのモードは2、平均は2.7となるが、これらの特性値を合否決定に使う合理的根拠を見出すことは困難である。そして、この結果は、1人ずつの可否投票に関する情報を含んでおり、それは次のようになることがわかる。もっとも、この場合の可否投票は、4番目の受験生で打ち切りとなる。

順位	1	2	3	4	5
可	51	41	26	15	7
否	0	10	25	36	44

今までは、投票総数 n を奇数と仮定したが、その理由は、メディアンが必ず投票番号のいずれかの自然数となり、議論が単純となるからであった。しかし、投票総数が偶数の場合には、メディアンが1.5や2.5などのように、自然数でなく、投票番号の midpoint となることもあり得る。その場合の合格者数は、メディアンを切り上げた数か、切り捨てた数かを決めておく必要がある。それは、可否投票についていえば、可否同数の場合にどうするかということである。合格とする場合には、メディアンを切り上げた整数値が解を与えることになる。例えば、 $n = 50$ の次の結果を考えよう。

投票番号	1	2	3	4	5
票数	10	15	11	8	6
累積票数	10	25	36	44	50

この場合、投票番号のメディアンは2.5となり、それを切り上げた整数値3が合格者数となる。実際、1人ずつの可否投票の結果は次のようになる

ことがわかる。

順位	1	2	3	4	5
可	50	40	25	14	6
否	0	10	25	36	44

この場合、3番目は可否同数となり、ここまです合格とすることになる。

メディアンによる上記の可否決定方式は、90年代のほんのわずかの間、実際の大学院入試の可否決定に採用され陽の目を見た。しかし、その後、定員確保と入試の多様化に伴って、可否判定方式も変わって行った。

ところで、この方法が1人ずつの可否投票と同等なことは、人間の判断の合理性を前提としており、途中で考えを変えるようなことがあれば、同等性は崩れてしまう。また、可否投票でも、下位

から行えば、上位からの場合と結果が異なってしまふかもしれない。可否決定に限らず、何らかの決定を行う際には、手続きのやり方に依存して、最終決定に違いが生ずるといような問題が潜んでいる。それは、とりもなおさず、神ならぬ人間のなせるわざなのであろう。

私が属している国立大学法人は、今年度から6年間の第2期中期目標期間に入った。国立大学法人に課せられている重要な検討課題として、組織の見直しが掲げられており、大学院、特に博士後期課程では、収容人数ではなく、入学者数で未充足が続けば定員の削減対象となり得る。ここで書いた話は、定員を気にせずに入学者を決めていたからこそ思いついたものであり、のどかな時代背景が生んだ産物であったと思う。

2. 2010年度統計関連学会連合大会について(第三報)

実行委員会委員長 稲葉敏夫 (早稲田大学)
プログラム委員会委員長 椿 広計 (統計数理研究所)
運営委員会委員長 吉村 幸 (長崎大学)

2010年度統計関連学会連合大会につきまして、第一報、第二報に続き、「第三報」をお届けします。本報が本大会に関する最後のご案内となります。5月10日(月)から6月1日(火)まで講演申込を受け付けました。おかげさまで、企画セッション講演79件(19セッション)、コンペティション講演23件、一般講演213件の申し込みを頂きました。既に原稿提出も7月9日(金)に終了し、現在8月19日(木)17時締め切りの事前参加申し込みが開始されています。今後詳細プログラムや変更事項は連合大会のWebページ<http://www.jfssa.jp/taikai/>に掲載しますので、そちらをご参照ください。なお、一般セッションの座長は昨年度より講演者・共著者から指名していますので、こちらもご確認の上、共著者が出席できない場合は事務局にご連絡ください。

本報では、連合大会について簡潔にまとめを行い、

皆様の便宜をはかりたいと思います。

2.1 会場について

大会は、早稲田大学早稲田キャンパスで9月5日(日)午後から8日(水)午後まで開催されます。5日はチュートリアルセッションと市民講演会のみですが、第3回横幹連合総合シンポジウムのプレナリーセッションも開催されています。

・早稲田大学早稲田キャンパスへのアクセスにつきましては、上記Webページから「会場」を参照いただくことにより、見ることができます。最寄駅の地下鉄東京メトロ東西線早稲田駅から徒歩5分です。なお、自家用車での来場はご遠慮ください。

・大会の会場について、5日(日)の市民講演会と横幹連合プレナリーセッションは18号館の早稲田大学国際会議場(井深大記念ホール)、5日(日)のチュートリアル並びに6日~8日のセッ

ションは、横幹連合シンポジウムも含め全て、7号館の1階から3階までの次の9教室を使っています。

早稲田大学7号館1階

受付：7-114 A会場：7-112

早稲田大学7号館2階

B会場：7-218 C会場：7-219 D会場：7-220

E会場：7-205 F会場：7-206 G会場：7-209

早稲田大学7号館3階

H会場：7-319 I会場：7-321

この他にも9月7日(火)11時45分からの日本統計学会総会が、7号館4階7-418室で行われます。

懇親会は、7日(火)18時より、大隈ガーデンハウス(25号館)で行います。

閉会式は、8日(水)15時10分より上記C会場で行います。

2.2 参加申し込みについて

本年も、大会に先立ちまして、事前参加申込をWebページにて始めています。大会Webページの「申込」よりお手続き下さい。申込期間は2010年8月19日(木)17時までで、カード決済と銀行振り込みがご利用いただけます。当日受付より大幅な割引がございますので、ぜひ、事前申込みをご利用下さい。

大会参加費(講演報告集代を含む)、チュートリアルセッション参加費(資料代を含む)、懇親会参加費とも、会員(共催6学会の会員)・学生(会員、非会員を問わず)・学生以外の非会員により参加費が異なります。詳しくはWebページの「大会詳細」をご覧ください。市民講演会は無料です。なお、非会員の招待者(企画セッション講演者、討論者)の方を除き、すべての講演者(一般・企画セッション・コンペティション講演を問わず)の方も参加申込みのお手続きが必要です。よろしくお願いたします。

2.3 大会プログラムについて

プログラムおよび大会案内はWeb上で公開(参加申込開始以前に公開予定)されるとともに、各学会選出のプログラム委員を通して各学会に通知されます。プログラム冊子は作成致しません。Webページには、html版およびpdf版を用意します。プログラムは講演報告集にも掲載されます。なお、講演者および共著者(共同研究者)の所属は講演申し込み時点のものです。

2.4 企画セッション一覧

各日毎に次のような企画セッションが設けられています。各セッションの配置されている時間帯、会場、テーマとオーガナイザー氏名(所属)は以下の通りです。全てのセッションが2時間全てを使う訳ではありません。詳細プログラム、テーマのねらいや講演者・講演タイトル等につきましては連合大会のWebページをご覧ください。

9月6日(月)10:00-12:00

B会場「横断型人材養成」:横幹連合企画・統計関連学会連合共催セッション:本多 敏(慶應義塾大)、渡辺美智子(東洋大)

G会場「環境・生態データのモデル化と解析(1)」:清水邦夫(慶應義塾大)

9月6日(月)13:00-15:00

B会場「問題解決型統計教育」:日本品質管理学会企画共催、横幹連合総合シンポジウム共催セッション:鈴木和幸(電気通信大)、渡辺美智子(東洋大)、椿 広計(統数研)

G会場「衛星リモートセンシングデータ実利用と精度」:日本リモートセンシング学会企画セッション:西井龍映(九州大)

9月6日(月)15:30-17:30

B会場「統計教育の質保証の枠組み」:統計関連学会連合統計教育推進委員会、日本統計学会統計教育委員会企画セッション:渡辺美智子(東洋大)

G会場「感性のデータ科学」:感性工学会企画セッション:領家美奈、小代禎彦(筑波大)

9月7日(火)9:30-11:30

B会場「環境・生態データのモデル化と解析(2)」: 清水邦夫(慶應義塾大)

D会場「世論調査の技術革新: コンピュータを用いた調査とその展望」: 田中愛治(早稲田大), 日野愛郎(早稲田大), 西郷 浩(早稲田大)

E会場「システム生物学に基づくトランスレーショナルメディシンにおける統計学的諸問題」: 井元清哉, 山口 類(東京大), 樋口知之(統数研)

G会場「ソフトウェア紹介(予備)」: 大会運営委員会企画セッション

9月7日(火) 13:00-15:00

B会場「海洋生態・水産資源データの解析と統計的モデリング」: 南美穂子(慶應義塾大)

D会場「調査の質マネジメント」: 日本品質管理学会企画セッション: 山本 渉(電気通信大)

E会場「抗がん剤第I相試験における統計の役割」: 石塚直樹(国際医療研究センター研)

G会場「ソフトウェア紹介」: 大会運営委員会企画セッション

9月7日(火) 15:30-17:30

B会場「食品安全性と統計科学との接点」: 大西俊郎(九州大)

D会場「臨床試験におけるデータ・モニタリング委員会と統計家の役割」: 越水 孝(ヤンセンファーマ)

E会場「金融の計量リスク管理」日本統計学会金融の計量リスク管理分科会企画セッション: 三浦良造(一橋大)

G会場「応用統計学会学会賞受賞者講演」: 応用統計学会企画セッション: 永田 靖(早稲田大), 岸野洋久(東京大), 黒木 学(大阪大)

9月8日(水) 10:00-12:00

C会場「計量生物学における統計的因果推論の役割」: 日本計量生物学会企画セッション: 上坂浩之(大阪大学) 黒木学(大阪大)

D会場「スポーツ統計科学の新たな挑戦」: 酒折文武(中央大), 田村義保(統数研)

9月8日(水) 13:00-15:00

C会場「日本計量生物学会奨励賞受賞者講演」:

日本計量生物学会企画セッション: 大森 崇(同志社大)

D会場「統計的分類手法の新展開とその応用」: 日本分類学会企画セッション: 山口和範(立教大)

2.5 コンペティション

今年度も、修士以下の学生会員や若手会員のより質の高い研究発表の奨励を目的としてコンペティションを実施します。コンペセッションは9月6日15:00-17:00E会場及び9月7日終日C会場で行われます。

評価基準: 研究内容のみならず、発表者各自が十分に工夫をしていかにうまく内容を伝えられたか、質問に的確に答えられたかといった発表の仕方も含め、全体として素晴らしいプレゼンテーションになっているかどうかを評価の対象とします。

審査方法: 大会におけるコンペティション講演の審査は、当日の口頭発表に対しての数名の審査員とコンペティション講演セッションの出席者の一般審査との総合評価で行います。セッションの参加者すべてに投票資格がありますので、本企画の趣旨をご理解の上、奮ってご投票ください。A, B, Cの3段階(A:受賞に値する, B:受賞としてもよい, C:受賞に値しない)で各報告者を評価していただきます。ただし、講演者ならびに共著者はその講演への投票は出来ません。審査は記名投票で行い、無記名投票は無効です。投票結果に基づき、プログラム委員会で選考します。

最優秀報告者1名、優秀報告者(原則として)3名を選考し、大会最終日9月8日(水)15時10分からC会場で行われる閉会式において、表彰式を執り行い受賞者を発表して表彰しますので、ぜひこちらにもご出席ください。

2.6 チュートリアルセッション

日時: 2010年9月5日(日) 13:00~16:00

会場: 早稲田大学早稲田キャンパス7号館2階

受付開始時間と場所: 12:30より早稲田大学早稲田キャンパス7号館

テーマ1：「標本調査法への統一的なアプローチと新展開」

講演時間：13：00－16：00

会場：B会場（早稲田大学早稲田キャンパス7号館2階7-218）

講師：土屋隆裕（統計数理研究所）・星野崇宏（名古屋大学）

テーマ2：「ベイズ理論の現在」

講演時間：13：00－16：00

会場：D会場（早稲田大学早稲田キャンパス7号館2階7-220）

講師：駒木文保（東京大学）

事前参加受付は、2010年度統計関連学会連合大会の上記トップページから「申込」に進んでWeb上で手続きができます（8月19日（木）17時まで）。あらかじめ参加費を納めていただく場合は、割引が受けられます。学生には特に大幅な割引があります。当日参加も受け付けます。当日受付の場合、参加費（資料代含む）は、会員（共催、協賛の6学会の会員）3,000円、学生（会員・非会員を問わず）3,000円、学生以外の非会員6,000円です。テーマは2つありますが、同じ時間帯に実施されますので、どちらか一方のテーマをお選びください。なお、途中でもう一方のテーマへ移動されても追加料金はかかりません。

2.7 市民講演会のご案内

今年の市民講演会では、以下のテーマで2名の先生方にご講演をお願いすることにしました。多くの方々のご参加をお待ちしております。

日時：2010年9月5日（日）16：30～18：00

場所：早稲田大学早稲田キャンパス18号館国際会議場（井深大記念ホール）

参加費：無料

テーマ：統計で社会・経済の深層を探る

講演者：

1) 田中愛治（早稲田大学）

「2010年参議院選挙と有権者の意識構造」

2) 吉野貴晶（大和証券キャピタル・マーケット（株））

「行動ファイナンスと株式市場－身の回りの情報と株価の深いつながり」

司会：椿 広計（統計数理研究所）

開催趣旨：今回の市民講演会では、統計を使って、国民の意識や投資家の行動、株式の動きなどを探っていらっしゃる研究者、実務家に政治・経済の今日的话题をご講演頂きます。統計が社会・経済においてどのような役割を持っているか、その面白さは何かなどを紹介して頂こうと考えています。統計関連学会の会員の方々、同期開催されている横断型基幹科学技術総合シンポジウムに参加の方々だけでなく、家族・友人・同僚の方々などをお誘いあわせの上参加頂き、大いに統計の面白さを共有頂ければ幸いです。

2.8 統計局・統計センター見学ツアー 公的統計過去から未来へ

総務省統計局、(独)統計センターは、今回の連合大会会場である早稲田キャンパスから徒歩圏であり、統計局のご提案で2回の見学ツアー（第1回：9月7日16時から、第2回：9月8日〔水〕9：45から）を組むことが出来ました。現地集合で、事前登録が望まれますが参加費は無料です。当ツアーでは、大正9年の第1回国勢調査の各種用品、明治初期からの貴重な文献や集計機器などをご覧いただけます。参加受付は、2010年度統計関連学会連合大会の上記トップページから「申込」に進んでWeb上で手続きができます（8月19日（木）17時まで）。

2.9 第3回横幹連合総合シンポジウム

9月5日午後と9月6日（月）は、第3回横幹連合総合シンポジウムが同期開催されています。相互協賛する第3回横幹連合総合シンポジウムのセッションについても、統計関連学会連合大会に登録すれば入室可能となっています。ただし、横幹連合総合シンポジウム資料については、統計関連学会連合大会と横幹連合との共催セッションでない限り、横幹連合シンポジウムへの登録を別途行わないと入手できません。現在、第3回横幹連

合シンポジウム（実行委員長：田村義保（統数研））「横幹技術の役割の新局面」の企画は次の通りです。また、上記統計関連学会連企画セッションの中で、教育に関わるセッションと横幹連合会員学会（日本感性工学会、日本品質管理学会、日本リモートセンシング学会）共催セッションを横幹連合との共催セッションとしておりますが、これについては統計関連学会予稿集の中に予稿が掲載されています。横幹連合総合シンポジウムの詳細並びに、事前登録については<http://www.trafst.jp/symposium2010/index.html>を参照して下さい。なお、同シンポジウムで行われるセッションは次のようなものです。

9月5日（日）13時～16時 早稲田大学井深大記念ホール

プレナリーセッション：パネル討論「科学技術・イノベーション政策のあるべき姿」

吉川弘之（JST研究開発戦略センター センター長）、中鉢良治（ソニー株式会社 副会長）、安西

祐一郎（慶應義塾 学事顧問 慶應義塾大学 教授）、黒田玲子（東京大学 教授 国際科学会議副会長）

司 会：有本 建男（JST 社会技術研究開発センター センター長）

9月6日（月）早稲田大学早稲田キャンパス7号館2階で3会場パラレルセッション

午前

B会場 横幹人材養成（統計関連学会連合との共催）

C会場 サービス科学（産業技術総合研究所、統計数理研究所との共催）

D会場 パーティクルフィルタ

午後前半

C会場 知の統合：制御システムにおけるモデルベース設計・開発

D会場 行動経済学の前線

午後後半

C会場 経営高度化の最前線

D会場 環境配慮型社会とリアルオプション

3. シリーズ：統計学の現状と今後

3.1 「林木成長データ採取にたずさわって」

柳原 宏和（広島大学）

数理統計学を専門にしていると、データがどのようにして得られたかということを知る機会がありません。私はもう10年近く前になるが、自分で実際に山に入って林木成長データをとる機会を幸運にも得ることができた。ここではその話をしたい。

1997年12月京都で開催された第3回気候変動枠組条約締約国会議（COP3）において採択された京都議定書には、地球温暖化防止を目的とした温室効果ガス（モンテリオール議定書によって規制されているものを除く）排出の抑制、更にその量の削減を目指した政策及び措置を促進するために、関連部門において適切な改革を奨励するという条

目がありこまれており、温暖化防止への取り組みが地球規模での急務の課題となっている。温室効果ガスの中でも、特に温暖化への影響が最も大きいとされる二酸化炭素に関しては、その大気中の濃度を減少させるため、削減目標値が設定され、その目標値を達成するため、各国様々な政策が考案されている。二酸化炭素排出量削減方法としては、新たな技術開発ばかりでなく、森林などといった自然資源の活用による吸収も注目されている。森林に関しては、植林からその後の育林による大気中の炭素吸収機能が国レベルの二酸化炭素削減手法の1つとして加味され、その効果が期待されている。京都議定書では、森林による炭素固定について、新たに造成された森林や、人為的な管理を行っている森林等の二酸化炭素吸収量も削減目標値に加算できることが示されている。すなわち、

新植、再植林、更には適切な森林経営による二酸化炭素削減への貢献が考慮され、その量を目標値に加えることができることになる。

林木1本が吸収した二酸化炭素量は、林木の体積材積)に比例することが知られている。そのため、材積の成長を予測することができれば、林木が吸収する二酸化炭素量を予測することができ、ひいては、森林全体の平均成長量などを用いれば、森林全体が吸収する二酸化炭素量を予測できることになる。成長曲線モデルを使って成長量を予測するためには、言うまでもなく、材積の成長データが必要である。ところが、この林木1本の材積成長データを得るためには非常に大きな労力を必要とする。簡単に言えば、林木の成長データは林木の年輪の幅を測定することで得ることができる。この年輪は、林木を伐採することでしか測定することができない。現在の科学の進歩によって、X線などを使って伐採すること無く年輪幅を測定することも可能であるようだが、その測定機械はコンパクトなものではなく、山奥にある森林に持ち込むことはほぼ不可能なため、伐採して年輪幅を測る方法しか今のところ有効な方法ない。年輪幅は、伐採された林木を、地上20cmから1または2m間隔で採取された円板で、4方向測る。伐採は林業関係者の方に依頼するため、実際に伐採するときの苦労というものはほとんどない。しかしながら、依頼すれば円盤を持ってきてもらえるというわけではなく、みずから伐採現場に行き、伐採作業中に円盤をもらわなくてはならない。ところが、夏には蛇が出て危険であるため、円盤採取は、ほとんど冬に行われる。基本的に雨が降ろうと雪が降ろうとおかまいなしである。とにかく寒い。寒い中待機して、円盤ができたらどんどん伐採されていく丸太の上を歩き来して円盤をもらいに行かなくてはいけない。雪が降っていようものなら、もう最悪である。ただでさえ不安定な丸太が非常にすべりやすくなる。実際、円盤を抱えながら雪が積もった丸太を歩いているとき、滑って転んでしまい、丸太で肋骨を強打し、しばらく息ができずにうずくまってしまったという経験をし

た。

無事に円盤が採取できた後は、年輪幅を測定しなくてはいけない。これも機械があるわけではなく、実際に自分の目で幅を測る必要がある。年輪幅を測定するには、ノギスと呼ばれるスライドの付いた定規のようなものを使う。測ると一言で言ってしまうれば楽そうに思えるかもしれないが、1m間隔で切られた円盤がだいたい1本あたり20枚近くあるわけで、樹齢が40年の林木であれば、40本の年輪の幅を4方向で測らなければいけないわけであるから、その作業量は想像を絶するものがある。また、普段の生活では年輪についてさほど目が向かないため気がつかないが、年輪には偽年輪と呼ばれる年輪っぽいのが年輪でないものが存在する。それを間違えてカウントしてしまえば、ある方向では30本の年輪があり、ある方向では31本の年輪があるといったことが起きてしまう。そうなったら1から数え直しである。また樹種や地域によって年輪の幅はまちまちで、ひのきのように年輪がとても詰まっている樹種では、成長幅が1mmなんてものはざらにある。そのような細かい作業を繰り返すわけであるから、とにかく疲れる。全部で40本くらいの木の年輪を測定するのに5人で丸4-5日かかった覚えがあるが、詳しくはよく覚えていない。とにかくふらふらになりながら測定したことだけは覚えている。現在では、円盤の写真を取り、画像として取り込んでPC上で年輪を測ることもできるようだが、それでもやはり自分の目で測定しなくてはならず、作業量としてはあまり変わらない。

そのように苦労して採取したデータであっても、解析するときにはエクセルなりでまとめられた形であがってくる。エクセルファイルを見るだけでは、採取の苦労がまったくわからない。何も知らなければ「もっとたくさんのデータを取って来てください」と平気で言ってしまうだろう。しかし、データ採取の現場を経験した今では、「もっとデータを増やせ」なんてことはなかなか言えない。数理統計学者といえども、データ採取の現場に立ち会いデータ採取の苦労を肌で感じることは重要

なことではないだろうか。そうすれば、解析者とのギャップを少しでも埋めることができるのではないだろうか。

3.2 「計算代数統計の研究をはじめて」

青木 敏 (鹿児島大学)

計算代数統計という分野で私が研究を始めて、そろそろ10年になります。古い研究ノートで確認したところ、この分野を学ぶきっかけとなった Diaconis と Sturmfels の1998年の論文の内容を、当時私が所属していた研究室の輪講で紹介したのが、2001年6月28日でした。もちろん私がこの論文を手にしたのはそれよりもかなり前なのですが、その研究室輪講をきっかけに、当時の私の指導教官である竹村彰通先生と、この分野に関するディスカッションが始まりましたので、実質的な研究開始年月日といえます。当時は、この分野で10年も私が研究をすることなど、まったく予想していませんでした。研究活動において、テーマ選びはもっとも重要だと思いますが、研究人生のスタートに良いテーマに巡り合えた私は、本当に幸運でした。そして私の幸運はそれだけにとどまらず、振り返って客観的に見ても、本当に恵まれた研究活動ができていたと思います。もちろん、最大の幸運が、竹村先生に巡り合えたことであることは、言うまでもありませんが。

今回、内田先生より会報の原稿依頼を受け、未熟な私が日本統計学会の先生方に対して何を書けるか、悩みました。私はもう若手とは呼んでもらえない年齢に差し掛かってはいますが、会報のバックナンバーを読むうち、私が如何に狭い視野と見識しか持っていないか、目先の研究に集中することに精一杯であったかを痛感しました。私に書けることといえば、結局「自分の」研究のこと以外にはありません。それならば、私が研究人生のスタートで、数々の幸運に恵まれたことを書いてみようかと考えました。私は大学院生の時、精神的にきつい時期がありましたので、もし今、将来が不安で研究者を目指すことを迷っている学生の

方には、読んでいただいて、前向きな印象を持っていただければ嬉しく思います。とはいえ、最近の若手の皆さんの研究発表を学会等で見るたび、同時期の私と比較して、そのレベルの高さに驚かされ、自信に満ちた姿にはただ感心するばかりなのが事実です。むしろ私のことを「幸運と言いなながらあの程度か」と、反面教師として笑っていたければ幸いです。もちろん「自分ならばもっとできるから、今から参入してやろう」と、計算代数統計の分野に殴り込みをかけていただければ、これほど嬉しいことはありません。

冒頭で紹介した Diaconis と Sturmfels の論文を私がはじめて手に取ったのは、1999年。私は博士後期課程の2年生でした。私の学位論文は、その段階では微妙な状況にあり、依然、論文を漁ることは私の日課のひとつでした。その論文は、私の研究テーマである「分割表」をキーワードに含んでいたのですが、学位論文のテーマからは少し遠いと思われました。それを、なぜわざわざコピーしたのか、当時の気持ちを完全には思い出せませんが、理由のひとつに、1章がとともわかりやすい論文だったことがあると思います。これは私にとっては本当に幸運と言ってよく、なぜなら私はその論文の主定理をまったく理解できなかったのです。それも、証明しようとしている事が何かすらわからない、というレベルでした。「何やら難しい数学を使っている。さすがはASの論文だ。とりあえず学位論文には無縁だろう。」というのが私の印象でした。私には、そこに使われている「多項式環」「イデアル」「グレブナー基底」などの用語を数学辞典で調べるような勤勉さも、精神的余裕も欠けていました。が、もし仮にそれがあったら、難解さに音をあげてそれっきりになっていたかもしれません。私にとっての幸運は、1999年12月に、神戸大学大学院理学研究科の高山信毅先生が東京大学で行った、多項式環のグレブナー基底に関する集中講義に出席できたことです。この集中講義の案内を偶然目にし、「あの論文」関係のキーワードを見つけ、軽い気持ちで出席した集中講義は、単項式順序や多項式環の定義から

始まり、グレブナー基底の定義に至る、まるで私のために準備して下さったのではないかと思うような内容でした。なにより楽しかったのは、初日の講義の宿題として、Asir というフリーの計算代数ソフトウェアのインストールと、実際にそれを動かして計算する演習問題が課されたことです。この「実際に計算できる」という部分は、計算代数統計という分野における最大の魅力の一つだと思いますが、私は幸運なことに、入り口でさっそくその機会を与えていただいた（それも、手取り足取り、丁寧に解説していただきながら）わけです。この集中講義をきっかけに、私はグレブナー基底の勉強を一から始めました。「あの論文」の主定理を理解する、という、はっきりとした当面の目標があったことと、集中講義によって大まかな雰囲気を取ってきけていたことが、新しい分野でも尻込みせず、前向きな姿勢になれた原因だと思います。

さらにこの時期、私自身の立場について、大きな変化がありました。2000年8月、私は博士後期課程3年生でしたが、当時の研究室の助手の川鍋一晃先生が、11月よりドイツの研究所にご栄転されることに決まり、後任として私を雇っていただける、というお話があったのです。また、前年に廣津千尋先生が御退官されてから不在だった研究室の教授に、2001年4月に経済学部から竹村彰通先生が移ってこられる、というお話も同時に聞かされました。もちろん私に断る理由などありませんでした。その年の学位取得は諦めることになるとは言っても、そもそも取れるか分からないような状態でしたし、その後の就職のあてもない私にとっては、本当にありがたいお話でした。そして何よりその場合、私の指導教員を竹村先生に引き受けていただける、ということが最大の魅力でした。結局私はほとんど迷わず、11月から助手に着任すること、学位は5年くらいで論文博士の取得を目指すこと、なるべく多く論文を書いて、就職活動をする、などが決まりました。また、私は竹村先生に、月一回のペースで研究の報告を行うことになりました。竹村先生との最初のディス

カッションは、9月25日に経済学部の竹村先生の部屋で行われました。その衝撃は、今も忘れられません。私がお話のときに説明した（計算代数統計とは関係のない）研究内容は、自分自身、「単純すぎて価値があるのか分からない」と考えていました。しかしそれに対する竹村先生のコメントは、「テーマはそれでいいから、とにかくきちんとまとめなさい」というものでした。結局そのテーマは、投稿までにそれから半年かかり、主要結果は当初の想像からは少し変化したものになりましたが、面白いと感じたらとにかく形にすること、そのために数学の勉強は絶えず続けること、つまり、「継続的に論文を書きながら数学を学ぶ」という姿勢は、当時、はじめから「価値のある結果を出そう」とか「最低でもこれだけのことをしなければ」などという先入観に縛られ、悩むことが多かった私にとって、道しるべとなりました。2001年の5月には、同時に進めていたもうひとつのテーマも投稿し、結局そこまでが私の学位論文の第1部となりました。そして6月から、いよいよそれまで温めていた、計算代数統計の研究を始めました。学位論文としても、私の研究テーマである分割表をキーワードに、計算代数統計を第2部とする構想が自然に考えられ、テーマの変更や指導教官の変更に伴うストレスなどが全くなかったことも、幸運だったと思います。

計算代数統計の研究の出発点となったのは、やはり、Diaconis と Sturmfels の1998年の論文でした。私はその頃はなんとか論文の主定理を理解できるようになっており、たしかにその論文が、画期的なものであると確信していました。ところが、竹村先生に最初にそれを説明したときの感想は、その論文が、センスが悪いのではないか、というものでした。私はもちろん、たいへん驚きました。しかし、では代わりにどのような方針でこの問題が解けるかを、一から考えていくだけの時間的、精神的なゆとりがあったことは、幸運と言うよりないと思います。それから数ヶ月、竹村先生と私は、膨大な量のディスカッションと研究メモを交わし、2002年3月、最初の共著論文の投稿にこぎ

着けました。その内容を簡単に説明すると、ある問題に関して、非常に原始的な方法でパターンをしらみつぶしに手作業で尽くすことで、興味深い定理が証明できる、というものでした。私たちの方法は、同じ問題に対して、グレブナー基底という数学の大道具を使って取り組んでいる Diaconis と Sturmfels の論文とは、対極にありました。私は、使っている数学があまりに単純であったので、自分たちの研究が周囲にどう評価されるのかは正直確信がありませんでした。（ただ、いずれかの雑誌に掲載されることは大丈夫だと思いましたが、これでまた学位取得に一步前進、と、それだけで十分満足してしまっていました。）ですのでその後、（ほとんど間をあげずにあと2本の論文を投稿したのち、）Sturmfels 先生にそれまでの結果をメールで送ったところ、はじめこそ、やや誤解があったものの、すぐに私たちの結果に興味を示され、認めていただけことには、本当に幸せを感じました。Sturmfels 先生に興味をもっていたことで、それまで全く繋がりのなかった代数の研究者との繋がりができ、この分野にますますのめり込んでいくことになりました。大阪大学情報科学研究科の日比孝之先生と、立教大学理学部の大杉英史先生の名前も、はじめは Sturmfels 先生から紹介していただきました。Sturmfels 先生はメールで、「ところで、彼らの仕事は知っているか？」と、お二人の論文をいくつか挙げ、「彼らは代数の専門家だから、彼らに会いに大阪に出張してくるといいよ」と勧めてくださいました。2003年の春の数学会の会場で、初対面を果たし、以後、今まで、継続的に研究打ち合わせをさせてもらっています。

私たちの初期の結果は、代数の先生にも、統計学の先生にも、驚くほど高く評価していただきました。そこにはいくつかの要因があったと思いますが、ひとつには、テーマの選択についての幸運が大きかったことが、研究を進めるにつれわかってきました。例えば、一番初めの論文で扱った問題（分割表としては、 $3 \times 3 \times K$ 表となります）は、私たちの原始的な方法で扱える問題のサイズとし

ては、ぎりぎり限度いっぱいでした。実際、その後、分割表の水準を1だけ増やした問題（ $3 \times 4 \times K$ や $4 \times 4 \times 4$ ）についても挑戦しましたが、それはまともに書くとA4で数百ページを超えてしまうことがわかりました。一方で、グレブナー基底の計算については、 $4 \times 4 \times 4$ の問題は、2002年の夏の頃にはまだまだ計算困難なサイズでした。（しかし代数アルゴリズムの研究も精力的に進められて、2005年には、 $4 \times 4 \times 4$ の問題もグレブナー基底が計算できることが示されました。つまり、あと数年、私たちの結果が遅ければ、評価も全く違っていた可能性があります。）計算代数の分野には独特の雰囲気と活気がありました。例えば、2003年3月、私は神戸大学で、高山先生らの研究集会（第11回 Risa コンソーシアム研究集会）で研究発表を行いました。研究集会の2日後には、研究集会で一緒した神戸大学大学院理学研究科の野呂正行先生より、「実際に計算をやってみました」とメールで計算結果が届きました。それは、私がそのソフトウェアでの計算に失敗していた問題でした。冒頭に書きましたように、実際に計算できることが、この分野の最大の魅力だと思いますが、私のような初心者にとっては、やはり計算の専門家との交流はたいへん貴重でした。また、統計学の側面でいうと、私たちの問題は、3元分割表の確率母数の対数線形階層モデルの中では唯一分解可能でない、無3因子交互作用モデルでした。ですので、私たちの方法（マルコフ基底法）は、単なる「概念の遊び」ではないという、応用上の重要性が主張できました。もちろん、これらのことはすべて繋がりを持っており、「難しい問題は、どの方面から取り組んでも難しい」というのが、正しい見方なのかもしれません。

2008年10月から、日比先生を代表者とする、科学技術振興機構 CREST の、領域「数学と諸分野の協働によるブレークスルーの探索」の研究課題「現代の産業社会とグレブナー基底の調和」のプロジェクトが開始されています。研究プロジェクトは、理論系、応用系、計算系の3グループからなり、それぞれ、日比先生、竹村先生、高山先生

がプロジェクトリーダーを務められています。このような、分野横断型のプロジェクトが立ち上がったのは、ひとえに、日比先生の力によるもので、学会も違う3分野の研究者が一堂に会する研究集

会などは壮観（&不思議な気分）です。私も応用系の一員として、研究に取り組んでいます。この分野、まだまだ解きたい問題は山積みです。

4. 博士論文・修士論文の紹介

会報No.143で記載できなかった博士論文・修士論文を紹介いたします。(1) 氏名 (2) 学位の名称 (3) 取得大学 (4) 論文題名 (5) 主査または指導教員、の順に記載いたします(敬称略。カッコ内は取得年月、ただし平成22年2～3月取得の場合は省略)。

博士論文

- (1) 大山 哲司 (2) 博士 (医学・バイオ統計学) (3) 久留米大学 (4) 層別ランダムサンプリング/ランクトセットサンプリングにおける事前値を組み込んだ母集団特性値の推定 (5) 柳川 堯
- (1) 椛 勇三郎 (2) 博士 (医学) (3) 久留米大学 (4) 横断的調査における男子中学生の視力低下に関連する諸要因の探索とその影響 (5) 柳川 堯
- (1) 首藤 英樹 (2) 博士 (医学) (3) 久留米大学 (4) 病院内における転倒・転落事故発生の薬剤危険因子に関するケース・クロスオーバー研究 (5) 柳川 堯
- (1) 室谷 健太 (2) 博士 (医学) (3) 久留米大学 (4) 同一患者に適用して得られたカテゴリカルデータに基づく直接法による2つの診断法の比較 (5) 柳川 堯
- (1) 横山 暁 (2) 博士 (工学) (3) 慶應義塾大学 (4) A Study on the Analysis of One-mode Proximities and Its Applications (5) 篠崎 信雄 (平成21年3月)
- (1) 松浦 峻 (2) 博士 (工学) (3) 慶應義塾大学 (4) A Study of Statistical Issues in Selective

Assembly: Optimal Binning Strategies under Squared Error Loss (5) 篠崎 信雄 (平成21年9月)

- (1) 近河 拓也 (2) 博士 (工学) (3) 慶應義塾大学 (4) Estimation of Optimal Portfolio Weights Using Shrinkage Technique (5) 篠崎 信雄

修士論文

- (1) 古賀 秀信 (2) 修士 (医科学) (3) 久留米大学 (4) 採血検査所見と在院日数・医療費との関連 (5) 角間 辰之
- (1) 藤後 修 (2) 修士 (医科学) (3) 久留米大学 (4) 医師の見解を生かしたある適応型臨床試験デザイン (5) 柳川 堯
- (1) 友田 秀紀 (2) 修士 (医科学) (3) 久留米大学 (4) 脳卒中患者の歩行自立に至る期間の統計学的考察 (5) 服部 聡
- (1) 浜田 泉 (2) 修士 (医科学) (3) 久留米大学 (4) サバイバルツリーによる生存データの解析 (5) 川口 淳
- (1) 東正 裕 (2) 修士 (医科学) (3) 久留米大学 (4) アンケート調査に基づく生活習慣とBMIの多変量解析 (5) 川口 淳
- (1) 日高 好博 (2) 修士 (医科学) (3) 久留米大学 (4) 健診データに関するバイオ統計学的考察の研究 (5) 柳川 堯
- (1) 本間 剛介 (2) 修士 (医科学) (3) 久留米大学 (4) 遺伝子データにおける機能グループ解析 (5) 川口 淳

5. 会員から

5.1 総務省統計局ホームページ「統計学習サイト」のリニューアル

三上 明輝（総務省統計局）

総務省統計局の川崎茂局長からの依頼により、以下をお知らせします。

総務省統計局は、5月12日、統計局ホームページ中に設けられている「統計学習サイト」を一新し、児童・生徒向けの「なるほど統計学園」

<http://www.stat.go.jp/naruhudo/index.htm>

と、「統計学習の指導のために（先生向け）」

<http://www.stat.go.jp/teacher/index.htm>

を開設しました。

主に小学校高学年から中学生をターゲットとする「なるほど統計学園」では、「発見・気づき」、「納得」、「親しみ」をコンセプトに、統計データを提供するだけでなく、統計を読み解くために必要な幅広い知識を楽しみながら学ぶことのできる情報を発信します。先生向けサイトでは、統計局が実施する統計調査の結果を使用した授業モデルや、統計を扱う授業に活用できる補助教材を提供します。

利用者の方々からのフィードバックを活かしながら、今後もサイトの充実・発展を図ってまいります。リニューアルされた統計学習サイト「なるほど統計学園」及び「統計学習の指導のために（先生向け）」を是非ご利用ください。

5.2 政府統計のマイクロデータの利用について

油井清吾（独立行政法人統計センター）

独立行政法人統計センター情報技術部研究主幹

からの依頼により、以下をお知らせします。

5.2.1 公的統計の二次利用制度

平成21年4月に全面施行された統計法により、公的統計の二次利用のための新たな枠組みが創設され、学術研究や高等教育への利用を図るため、「匿名データの作成・提供」と「委託による統計の作成（オーダーメイド集計）」の制度が発足しました。

また、今後の公的統計整備の基本的な指針となる「公的統計の整備に関する基本的な計画」（平成21年3月13日閣議決定）では、統計データアーカイブの整備に向けた取組の実施を求めている。また、独立行政法人統計センター（以下「統計センター」という。）が各府省からの調査票情報、匿名データ等の保管及びオーダーメイド集計や匿名データの提供の委託の受け皿となる体制を整備するよう必要な措置を講じることとしています。

そのため、統計センターでは、行政機関等からの委託を受けて、調査票情報等の保管・蓄積、匿名データの作成・提供及びオーダーメイド集計のサービスを提供する統計データアーカイブを運営しています。

5.2.2 統計センターにおける匿名データの提供及びオーダーメイド集計

統計センターでは、行政機関等からの委託を受けて、学術研究や高等教育を目的とした一般からの申出に応じて、次のような匿名データの提供及びオーダーメイド集計を行っています。なお、今後とも行政機関等からの委託は拡大していく予定です。

○匿名データについては、現在、下表の4調査の提供を行っています。

府省名	調査名（調査年次）	匿名データの概要
総務省	全国消費実態調査 （平成元，6，11，16年）	3大都市圏か否か別の二人以上世帯及び単身世帯の家計収支、貯蓄・負債等に関する匿名データ
	社会生活基本調査 （平成3，8，13年）	3大都市圏か否か別の10歳以上の世帯員の生活時間，生活行動等に関する匿名データ
	就業構造基本調査 （平成4，9，14年）	3大都市圏か否か別の15歳以上の世帯員の就業及び不就業の状態等に関する匿名データ
	住宅・土地統計調査 （平成5，10，15年）	都道府県別の住宅及び住宅以外で人が居住する建物，世帯の居住状況等に関する匿名データ

○オーダーメイド集計については、現在、下表の4調査に係る統計の作成等を行っています。

府省名	調査名（調査年次）	使用可能なデータ
総務省	国勢調査 （平成2，7，12，17年）	抽出詳細集計用データ（一部の世帯を抽出したもので，就業者の産業・職業の小分類が付されている）を用いた統計の作成等
文部科学省	学校基本調査 （平成20年度）	うち，大学・大学院・短期大学の学校調査及び卒業後の状況調査のデータを用いた統計の作成等
厚生労働省	賃金構造基本統計調査 （平成18年）	個人票（10人以上の常用労働者を雇用する民営事業所に雇用される常用一般労働者の賃金等）のデータを用いた統計の作成等
国土交通省	建築着工統計調査 （平成21年度）	建築物着工統計及び住宅着工統計のデータを用いた統計の作成等

5.2.3 統計センターにおける学術研究機関との連携協力

統計センターの公的統計に係る取組みに賛同する法人と、連携協力協定を締結し、公的統計の二次利用に係る研究・開発及び普及・啓発を共同で推進するとともに、これらの法人に統計センターが運営するデータアーカイブのサテライト機関として、研究者等に向けた匿名データの提供やオーダーメイド集計の事務を分担していただくこととしています。

☆ 連携協力協定を締結する法人の要件

- (1) 国立大学法人法（平成15年法律第112号）に基づき設置された国立大学法人及び大学共同利用機関法人
- (2) 私立学校法（昭和24年法律第270号）に

- 基づく学校法人により設置された私立大学
- (3) 独立行政法人通則法（平成11年法律第103号）及び個別法の定めるところにより設立された独立行政法人
- (4) 法人税法（昭和40年法律第34号）別表第1に掲げる公共法人
- (5) 公益社団法人及び公益財団法人の認定等に関する法律（平成18年法律第49号）により公益性の認定を受けた公益法人（特例民法法人を含む。）

政府統計マイクロデータの利用にご関心のある方は、統計センター又は各サテライト機関のホームページを参照するか、それぞれの受付窓口にてお問い合わせください。

匿名データの提供に関するお問い合わせ	一橋大学経済研究所附属社会科学統計情報研究センターマイクロデータ分析セクション ホームページ: http://rciss.ier.hit-u.ac.jp/Japanese/micro/index.html メールアドレス: micro@ier.hit-u.ac.jp
	神戸大学大学院経済学研究科研究助成室データ管理室担当 ホームページ: http://www.econ.kobe-u.ac.jp/kuma/satellite/index.html メールアドレス: satellite@econ.kobe-u.ac.jp
	法政大学日本統計研究所マイクロ統計情報提供ユニット ホームページ: http://www.hosei.ac.jp/toukei/micro/index.html メールアドレス: jsri@s-adm.hosei.ac.jp
	統計センター情報技術部情報管理課統計データ高度利用推進室 利用審査担当 ホームページ: http://www.nstac.go.jp/services/anonymity.html メールアドレス: nijiriyou@nstac.go.jp
オーダーメイド集計に関するお問い合わせ	統計センター情報技術部情報管理課統計データ高度利用推進室 利用審査担当 ホームページ: http://www.nstac.go.jp/services/order.html メールアドレス: nijiriyou@nstac.go.jp TEL: 03-5273-1205
連携協力に関するお問い合わせ	統計センター情報技術部情報管理課統計データ高度利用推進室 企画担当 ホームページ: http://www.nstac.go.jp/services/cooperation.html メールアドレス: satellite@nstac.go.jp TEL: 03-5273-1205

6. 2010・2011年度評議員選挙結果

2010年6月17日(木)、統計情報研究開発センターにおいて、選挙管理委員2名(櫻井尚子、岩下登志也)により、2010・2011年度評議員選挙の開票が行われました。その結果、定員規定により、次の40名が選出されました。

赤平昌文 浅井 学 岩崎 学 牛澤賢二
 大林千一 大森裕浩 大屋幸輔 狩野 裕
 鎌倉稔成 川崎 茂 国友直人 久保川達也
 栗木 哲 栗原考次 桑原廣美 駒木文保
 西郷 浩 佐藤朋彦 佐藤 学 清水邦夫
 瀬尾 隆 竹内光悦 竹田裕一 田村義保

垂水共之 塚田真一 椿 広計 富澤貞男
 馬場善久 樋口知之 藤井良宜 藤越康祝
 舟岡史雄 前田忠彦 槇田直木 美添泰人
 吉田朋広 若木宏文 渡部敏明 渡辺美智子
 (以上40名, 50音順)

なお、有権者1,377名中、投票者数113名、投票用紙延べ記名数531、うち有効497、同無効34でした。

2010・2011年度評議員選挙管理委員
 櫻井 尚子
 岩下 登志也

7. 研究部会新設公募

統計学の研究活動を助成するため、日本統計学会が1954年に研究部会制度を設けて以来、これまでに多くの研究部会が誕生し、統計の発展に寄与して参りました。この制度は、公募制をとり、原則として年1ないし2件が評議員会の承認を得て発足します。部会の設置期間は原則、2年以内とします。補助金は1部につき年間10万円で、部会設置後1年を経過したとき、過去1年間の部会の経過報告書及び会計報告書を、また設置期間が終了したとき、経過ならびに成果に関する報告書及び会計報告書を評議員会に提出しなければなりません。また、部会の設置期間終了のとき、寄与した成果について、本学会会報等に報告を掲載して広く会員に公表するものとするになっています。

以下の要領で研究部会を公募いたしますので、ふるってご応募ください。

締切日 2010年11月15日

応募先

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町3-6

能楽書林ビル5F

財団法人 統計情報研究開発センター内

日本統計学会担当

Tel & Fax : 03-3234-7738

E-mail : shom@jss.gr.jp

応募書類の書式は学会ホームページよりダウンロードください。採否は12月に開催予定の評議員会にて審議の上、決定します。

なお、研究分科会（設置期間4年間）については随時募集しております。こちらにも積極的にご応募ください。研究分科会の趣旨等については会員名簿の記載または学会ホームページをご参照ください。

8. 理事会議事録

2008・2009年度 第7回理事会議事録

日時：5月29日（土）12：00～15：00

場所：統計数理研究所 八重洲サテライトオフィス会議室

出席者：美添泰人会長、岩崎学理事長、谷口正信（会誌編集・欧文）、渡部敏明（会誌編集・和文）、内田雅之（広報・会報）、根本二郎（広報・ウェブ）、稲葉由之（大会・プログラム）、星野伸明（大会・プログラム）、橋口博樹（大会・運営）、山下智志（庶務会計）、中西寛子（庶務会計）、各務和彦（庶務会計）（以上12名、カッコ内は役割分担）

報告事項：

<議題1>理事長からの報告

岩崎理事長より、学術振興会賞等の各賞の推薦状況が報告された。

<議題2>各理事からの報告

[欧文誌]

谷口担当理事より、英文誌の編集状況と、小川賞の選定状況について報告された。

[和文誌]

渡部担当理事より、和文誌の編集状況が報告された。

[広報]

内田会報担当理事より、会報No.143が発刊されたことが報告された。また、会報No.144の進捗状況が報告された。

根本ウェブ担当理事より、英語HPの更新状況について説明があった。

[涉外]

前園担当理事に代わり山下理事より、資料に基づいて日本・韓国・台湾の国際セッションの進捗状況が報告された。

[大会・プログラム]

稲葉担当理事より、資料に基づいて2010年度統計関連連合大会について説明があった。

[大会・運営]

橋口担当理事より、大会運営の進捗状況が報告された。

[庶務]

中西担当理事より平成22年度科学研究費補助金研究成果公開促進費「学術定期刊行物」が採択されたこと、および、入札の結果、欧文誌を引き続きテラパブが担当することが報告された。今後は当該年度の入札でなく、複数年度の契約についても検討することの必要性が説明された。

各務担当理事より科学技術振興機構の海外への普及促進に参加して、J-STAGEで公開されている論文を国際的に発信するプログラムに参加したことが報告された。

<議題3>春季集会について

稲葉理事より、春季集会が無事終了したことが報告された。

審議事項：

<議題1>09年度決算案、事業報告および今後の会計書類の形式について

山下担当理事より、資料に基づいて2009年度事業報告案・決算案が提示・説明され、検討が行われた。

<議題2>10年度予算案と事業計画について

中西担当理事より、資料に基づいて2010年度事業計画案・予算案が提示・説明され、検討が行われた。

<議題3>60周年記念基金について

岩崎理事長より、60周年記念基金について説明があり、60周年記念基金運営委員会（メンバー：美添会長、岩崎理事長、山下庶務会計理事、中西庶務会計理事）の2010年4月1日付での発足が確認された。

<議題4>日本統計学会の法人化について

岩崎理事長より、資料に基づいて日本統計学会の法人化について説明が行われ、検討された。検討の結果、法人化に向けて準備を進めていくことが確認された。

<議題5>統計学の資格認定について

岩崎理事長より、資料に基づいて統計学の認定試験について説明があり、検討が行われた。そして、統計学の資格認定の実施が理事会で了承され、準備委員会の設置が承認された。

<議題6>IMS-APRMへの日本統計学会からのInvited Sessionについて

岩崎理事長より、資料に基づいて2011年に開催されるIMS-APRMに日本統計学会からInvited Sessionを3件とDistinguished Lectureを1件推薦することが説明され、候補の選定が行われた。

<議題7>後援会名義の使用について

山下庶務担当理事より、資料に基づいて1件の後援と1件の共催の名義使用の申請があることが説明され、承認された。

<議題8>入退会の承認

山下庶務担当理事より、回収資料に基づいて入退会者・会員種別の変更・高齢会員について説明があり、承認された。

<議題9>今後の会務日程

次回理事会は7/17（土）に開催することが決められた。

<議題10>その他

岩崎理事長より、英文HPの大幅な改訂が必要である旨が説明され、必要なら予算措置を講じての英文HPの改訂が承認された。

9. 研究集会案内

● 研究集会 時空間統計解析の理論と応用

科学研究費補助金基盤研究 (A) (No.19200020)
代表：矢島美寛 (東京大学大学院経済学研究科)
期日：11月4日 (木) から6日 (土) 午前まで
場所：鎌倉商工会議所 (JR鎌倉駅より徒歩3分)

備考：

1. 海外からこの分野で著名な研究者を数名招聘する予定です。
2. 講演者多数の場合は4日午前より開催します。
3. 詳細については9月初旬にアナウンスします。
(矢島美寛 東京大学大学院経済学研究科)

10. 公募情報

● 安倍フェローシップ個人研究プロジェクト募集

国際交流基金日米センターは米国社会科学研究評議会 (SSRC) 及び米国学術団体評議会 (ACLS) と共同で、安倍フェローシップ個人研究プロジェクトを公募します。

安倍フェローシップは個人の調査研究プロジェクトに対する研究支援制度です。その目的は、社会科学と人文科学の分野における高度な政策指向型研究を促進し、日米の研究者間の新しい協働関係とネットワークを形成すること、また、これら研究者から比較研究あるいは国境を越える視点に立った研究への取り組みを引き出していくことです。学者、研究者、また学界以外の分野 (ジャーナリズム・法曹界等) の専門家からの申請を歓迎します。

申請資格は日米いずれかに研究の拠点をもち、博士号ないしは専門分野での同等の経験を有していることです。募集人員は15名前後。奨学金支給額は定額方式ではなく申請された研究プロジェクトによって個々に決定されますが、一般に研究費、

渡航費、滞在費、および給与補償分が支給されます。支給期間は最短3ヶ月、最長12ヶ月間です。応募はSSRCのホームページにてオンラインでのみ受付けています。締め切りは9月1日です。募集要項等の詳細については www.abefellowship.info をご覧下さい。

また、プログラム内容およびオンライン申請についての疑問点にお答えする安倍フェローシップ申請説明会を東京で2010年7月15日 (木)、福岡で7月20日 (火) 大阪で7月21日 (水) に開催いたします。当日は過去の安倍フェローを講師として迎える予定です。詳細は ssrcABE@gol.com までメールでお問い合わせ下さい。

SSRC安倍フェローシップ・プログラム東京事務所
〒160-0004 東京都新宿区四谷4-4-1

国際交流基金日米センター内

Tel : (03) 5369-6085 Fax : (03) 5369-6042

Email : ssrcABE@gol.com

11. 新刊紹介

本会会員からの投稿による新刊図書の紹介記事を、原稿の到着順に掲載します。

●Tomohiro Ando 著『Bayesian Model Selection and Statistical Modeling』Taylor & Francis Group CRC Press, \$89.95, May 27, 2010

●日本テスト学会 編『見直そう、テストを支える基本の技術と教育』金子書房, 1,100円+税, 2010年4月

●永山貞則・勝浦正樹・衛藤英達 著『ワーク・ライフ・バランスと日本人の生活行動』日本統計協会, 2940円, 2010年4月

総務省統計局「社会生活基本調査」の生活行動のデータを用いて、日本人の自由時間における行動を分析することを目的としている。また、同調査の主要なデータについて1986～2006年までの時系列を付属CD-ROMに収録している。

12. 学会事務局から

学会費払込のお願い

2010年度会費の請求書が会員のお手元に届いていることと思います。会費の納入率が下がると学会会計に大きく影響いたします。速やかな納入にご協力をお願い申し上げます。また便利な会費自動払込制度もご用意しています。次の要領を参照の上、こちらもご活用下さい。

学会費自動払込の問合せ先

学会費自動払込問合せの旨とともに、氏名と住所を以下にお伝えください。手続きに必要な書類が送付されます。

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町3-6
能楽書林ビル5F

財団法人 統計情報研究開発センター内

日本統計学会担当

Tel & Fax : 03-3234-7738

E-mail : shom@jss.gr.jp

訃報

次の方が逝去されました。謹んで追悼の意を表

し、御冥福をお祈り申し上げます。

佐倉 致 会員
濱田 年男 会員

入会承認

秋田智之, 石垣司, 鶴田正博, 大貫裕二, 岡村和弥, 小野寺剛, 笠井易, 来田宣幸, 楠田貴至, 栗原由紀子, 小谷野仁, 小山慎介, 齊藤善弘, 里麻克彦, 清水玄彦, 下津克己, 世古規子, 高橋文博, 樽見晋平, 永井勇, 中村智洋, 橋本翔, 廣津信義, 藤本翔太, 星野匡郎, 山野辺貴信, 山本雄三

(敬称略)

退会承認

新井宏忠, 稲垣宣生, 大倉玉圭, 大西雄基, 尾鷲瑞穂, 笠置文善, 木村等, 熊谷和也, 小谷正美, 関雅夫, 鷹野邦人, 竹内道夫, 新山毅, 林三男, 早瀬保子, 平尾秀夫, 溝口敏行, 三井康嗣, 宮崎一彦, 山岸義和, 吉野紀, ワイス株式会社

(敬称略)

現在の会員数（2010年5月29日）

名誉会員	20名
正会員	1,389名
学生会員	45名
総計	1,454名
賛助会員	16法人
団体会員	5団体

13. 投稿のお願い

統計学の発展に資するもの、会員に有益であると考えられるものなどについて原稿をお送りください。以下のような情報も歓迎いたします。

- 来日統計学者の紹介
訪問者の略歴，滞在期間，滞在先，世話人などをお知らせください。
- 博士論文・修士論文の紹介
(1) 氏名 (2) 学位の名称 (3) 取得大学 (4) 論文題名 (5) 主査または指導教員 (6) 取得年月をお知らせください。
- 求人案内（教員公募など）
- 研究集会案内
- 新刊紹介
著者名，書名，出版社，税込価格，出版年月をお知らせください。紹介文を付ける場合は100字程度までとし，主観的な表現は避けてください。
できるだけe-mailによる投稿，もしくは，文書ファイル（テキスト形式）の送付をお願い致します。

原稿送付先：

〒560-8531 大阪府豊中市待兼山町1-3
大阪大学大学院基礎工学研究科
社会システム数理領域
内田 雅之 宛
Tel & Fax：06-6850-6465
E-mail：koho@jss.gr.jp
(統計学会広報連絡用e-mailアドレス)

- 統計学会ホームページURL：
<http://www.jss.gr.jp/>
- 統計関連学会ホームページURL：
<http://www.jfssa.jp/>
- 住所変更連絡用e-mailアドレス：
meibo@jss.gr.jp
- 広報連絡用e-mailアドレス：
koho@jss.gr.jp
- その他連絡用e-mailアドレス：
shom@jss.gr.jp